543 6061 合金における各種溶加材による溶接性評価

昭和アルミニウム株式会社 研究開発部 技術研究所

○橋本武典、成願茂利

Weldability of 6061 Aluminum Alloy with Various Filler Metals

by Takenori HASHIMOTO and Sigetoshi JOGAN

1. 緒言

近年、構造物に対して押出性の優れた 6000 系合金の適用が多く検討されている。しかし、6000 系合金では溶接における高温割れ感受性が高く適正な溶加材を用いないと高温割れが発生することが知られている。これに対して JIS では、6000 系合金での推奨溶加材は 4043 であり、アルマイト処理を施し色調が問題となる場合は 5356 を使うように指示がされている。ただし、JIS の規定ではその他の溶加材（例えば 5183 など）の使用を禁じているわけではない。そのため、本報告では 6061-T6 を種々の溶加材を用いて割れ試験を行うことにより広範な JIS の規定の中で適正な溶加材の選定指針を示すことを目的とし、割れ感受性と溶接金属部の合金組成および継ぎ手強度の関係から検討を行った。

2. 実験方法2. 2 供試材

6061-T5 および比較材として 7003-T5 を用いた。いずれも板厚は 3mm とした。

なお、Table 1 にそれぞれの合金の化学組成を示す。

2. 3 割れ試験方法

割れ感受性はフィッシュボーン試験片（3×75×150¹、2mm スリット）による割れ試験を行い、その時の割れの長さで評価した。

2. 4 溶接方法

溶接は MIG 溶接で行った。溶接ワイヤーはいずれの溶加材についても φ1.2mm のものを用いた。Table 2 に用いた溶加材の化学成分を示す。なお、溶接条件としては溶接入熱量を 3 水準変化させた。

3. 実験結果

それぞれの溶加材における溶接入熱量と割れ長さの関係を Fig. 1 に示す。バラツキは大きいものの基本的に割れ長さは以下の順に短くなっていた。

4043 < 5356 < 5183 < 5554 (< 7003+5356)

このことは、従来から言われているように溶接金属部の Mg 量および Si 量が多いものほど割れ難い傾向を示している¹⁾。

さらに、継ぎ手の強度を Fig. 2 に示す。この図からわかるように継ぎ手強度は、以下の順に大きな値となっていた。

5356 > 4043 = 5183 = 5554

なお、破断位置はいずれの継ぎ手（余盛あり）においても熱影響部であった。

4. 結論

この結果から、溶接性および継ぎ手強度の観点から、6061 合金に対する適正な溶加材は従来から用いられている 5356 が最適であった。なお、発表では、溶接金属部（破断面を含む）での合金分析を行い組成および晶出相と割れとの関係について考察をおこなう。

参考文献：1) J.R.Davis et al:ASM Specialty Hand book, Aluminum and aluminum alloy, ASM international, (1996), p. 395.

Table 1 Chemical composition of material used.

Alloy	Si	Fe	Cu	Mn	Mg	Cr	Zn	Ti	Zr	Al
6061	0.73	0.16	0.19	0.06	1.05	0.07	0.01	0.02	-	Bal.
7003	0.05	0.16	0.14	0.03	0.71	0.02	5.60	0.03	0.17	Bal.

Table 2 Chemical composition of filler metal used.

Alloy	Si	Fe	Cu	Mn	Mg	Cr	Zn	Ti	Al
4043	5.30	0.22	0.03	0.01	0.01	-	0.01	0.01	Bal.
5356	0.10	0.15	0.01	0.10	4.91	0.10	0.01	0.09	Bal.
5554	0.10	0.16	0.01	0.70	2.67	0.10	0.01	0.09	Bal.
5183	0.07	0.16	0.01	0.69	5.00	0.08	-	0.01	Bal.

Fig.1 Relation between Heat input and crack length for various filler metals.

Fig.2 Tensile strength and 0.2% Yield strength of joints with various filler metals at 6061 aluminum alloy.